

今回から「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです  
**仕事は自ら「創る」べきで、与えられるべきではない。**(吉田秀雄 電通 4 代目社長)

『鬼十則』は次の 10 項目である。

- 一、仕事は自ら「創る」べきで、与えられるべきではない
- 一、仕事とは、先手先手と「働き掛け」で行くことで、受け身でやるものではない
- 一、「大きな仕事」に取り組み、小さい仕事は己を小さくする
- 一、「難しい仕事」を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある
- 一、取り組んだら「放すな」、殺されても放すな、目的完遂までは・・・
- 一、周囲を「引きずり回せ」、引きずるものと引きずられるものとは、永い間に天地の開きがでる
- 一、「計画」を持て、長期の計画を持っていれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生まれる
- 一、「自信」を持て、自信がないから君の仕事には、迫力も粘りも、そして厚味すらない
- 一、頭は常に「全回転」、八方に気を配って、一分の隙があってはならぬ、サービスとはそのようなもの
- 一、「摩擦を恐れるな」、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でないと君は卑屈未練になる

これは、全国の多くの企業に掲示されている『鬼十則』である。これは、電通 4 代目社長吉田秀雄が執筆し、社員に配布したものである。

吉田秀雄は 1928 年(昭和 3 年)に日本電報通信社に入社した。創業者の光永が公募で大卒者を採用した第一号である。その時、光永は「我々は常に一步先に進まねばならぬ。併行を以って満足するのは、必ず落伍する」として、社員の駆け足会を発足させた。「走れ、走れ」と言い、得意先を回る時もでも、「わき目もふらず、駆ける」ことを課した。朝は、始業時間とともにすぐに広告主のところに行くことを唱え、のんびりと社内であむろし、雑談などで時間を無駄にすることを非常に嫌った。臥薪嘗胆を信条とし、新年は払暁戦(払暁は夜の明けがたの意味)に限ると言って午前 3 時に新年の仕事初め式を行った。さらには、寒参り、富士登山などが実施された。寒参りとは、社員が白装束に身を包み、提灯片手に列をつくり、得意先から得意先へと回り、それぞれの店の繁栄と寒中見舞いを述べるものだ。富士登山は毎年 7 月に社長以下全社員が富士山に登り、山頂の郵便局から暑中見舞いのはがきを顧客に送る。富士登山は現在の電通でも連綿と続けられている恒例行事である。吉田もこうした社員鍛錬に率先して参加して、光永イズムを身につけ、光永の DNA を引き継いだ『鬼十則』が光永の経営理念を色濃く反映しているのは、このためである。『鬼十則』制定のいきさつについて、後年、インタビューで吉田はこう語った。「要は士気の問題なんです。ちょうど昭和 26 年ごろ、うちは一つの大きな山場を迎えていた。ここががんばらなければと自分自信が真剣にぶつかっていたところで、その時その時に感じたことを書きなぐったものです。電話をすませたあと、お客様の帰ったあと、わずかなヒマを見つけて書き付けたので、文章になっていませんが、この気持を社員にのみこんでもらいたいと思ってやったわけです」『鬼十則』は、社員に奮起を促すためのものであると同時に、吉田が自らを叱咤する言葉でもあった。「電通の鬼」光永星郎を乗り越えて、「広告の鬼」とならんとする吉田秀雄の気概が込められていた。

電通の創業者は誰ですか？

( )

あなたは、『鬼十則』の中で一番心に残ったものは何ですか？

( )